

リスク認知

人や物物に対して損害を与えるような可能性のある現象や活動について、その危険性をリスクという。また、その危険性についての認知をリスク認知という。

客観的には、リスクは想定される被害の大きさと生じる確率の積で表現される。このような客観的なリスクの評価は、被害の大きさや確率の評定について背景となる専門的な知識や情報をもっていて初めて可能になるものであるが、一般の人々はこのような専門的な数値をもとにリスクを実感しているわけではない。そもそも専門的な情報が得にくいこと、そして専門的に算出された数値が人々の実感と一致するとは限らないことから、人々がリスクをどのように捉えるのかは、客観的なリスク評価に基づく専門家の判断とは大きく異なることもある。

一般の人々のリスク認知については、主に①客観的リスク認知との乖離を認知バイアスとして捉える、②専門家の評価とは異なる次元でのリスクの認知、という2つの視点から検討が行われてきた。

●**リスク認知におけるバイアス** 専門家による客観的なリスク評価の2つの構成要素である事象の生じる確率と被害の大きさについて、一般の人々のリスク認知にはバイアスが存在することが知られている。確率判断に関しては、人々のリスク認知は、類似した出来事が記憶されていたり、想像しやすい場合に高まることが知られている(利用可能性ヒューリスティック)。例えば、近い時期に起こった災害や、マスメディアでの報道量が多い種類の事故については、関連する記憶が利用しやすい状態であるため、リスク認知が高くなる。また、全体的な確率を考慮せずに、典型的なケースと類似しているかという情報のみから確率判断してしまう傾向がある(代表性ヒューリスティック)。例えば、胃潰瘍は胃ガンよりもはるかに生じる確率が高いが、胃ガンに典型的な症状(胃潰瘍と胃ガンの初期症状は似ている)という情報が意識されると、胃ガンの可能性を過大に見積もることになる。

また、被害の大きさについては、客観的にはまったく同じ情報であっても、その提示の仕方によって異なる認知のされ方をすることがある。例えば、まったく同じ結果であっても、利益の枠組み(フレーム)と損失の枠組みで情報を提示した場合、その心理的インパクトは異なり、損失のフレームのインパクトの方が強い(フレーミング効果)。例えば、600人が死亡すると想定される疫病が発生したという状況に対し、ある対策をして「200人が助かる」(ポジティブ・フレーム)場合と「400人が亡くなる」(ネガティブ・フレーム)場合は確率的には同じ内容であるが、判断の参照点異なる。「400人が亡くなる」という対策は、全員が助かる状況を参照点とした損失の枠組みで捉えられてしまうため、避けられる傾向がある。

仮に一般の人々と専門家が同じように「被害の大きさと生起確率の積」という形でリスクを認知していたとしても、それぞれの要素に認知バイアスの影響がありうるため、同じ結論に至るとは限らない。

●一般の人々のリスク認知の次元 また、一般の人々と専門家のリスク評価が異なる原因として、一般の人々はそもそも「被害の大きさと生起確率の積」とはまったく異なる点に注目してリスクを捉えているケースが多いという点もあげられる。スロビック(1987)^[1]は専門家が考えるようなリスクの定義をあらかじめ設定せず、探索的に一般の人々のリスク認知の性質を検討した。その結果明らかになったのは、個人的な予防などのコントロールがきかないリスクや、日常的に実感できない新奇なリスクなどについては、人々はより危険度が高いと判断していたということである。そのため、確率と被害の大きさをもとにリスクを評価する専門家の判断とは異なるケースがある。例えば、原子力発電などの30種類の技術や活動について、専門家と一般の人々にそれぞれ危険度の順位づけを求めた場合、一般の人々は原子力発電を最も危険と認知しているのに対し、専門家の評価では原子力発電の危険度は下位(20位)であった。

人々が注目するリスクの性質について、少数の軸にまとめたものをリスク認知の次元とよぶ。スロビック(1987)は、遺伝子工学、放射性廃棄物、自転車など81のリスクについて、一般の人々を対象にその性質の評定を求めることでリスク認知の次元を検討した。その結果、「恐ろしさ」「未知性」の2つが主要な次元として抽出された。それぞれの次元について高く評しているほど、その対象について人々のリスク認知も高くなる。恐ろしさの次元には、被害の制御の難しさ、世界的な破滅を招く潜在性があるか、被害の影響が将来の世代まで持続するか、などの要因への評価が含まれている。また、未知性の次元には、被害の発生が観察可能か、新奇なものか、結果が後から表れるものであるか、などの要因への評価が含まれている。スロビックらは検討した81種類のリスクを、この主要な2つの次元上にマッピングしている。これを、リスク認知地図という。リスク認知地図によれば、例えば遺伝子工学や放射性廃棄物は恐ろしさと未知性の認知がともに高く、自転車や電気配線による感電は恐ろしさと未知性がともに低い活動である。また、未知性が低く恐ろしさの高い技術として核兵器や炭鉱事故、恐ろしさが低く未知性の高い技術として水道水の塩素消毒やサッカリンなどがある。

このように一般の人々のリスク認知の判断次元は専門家と異なっているが、これはリスクの定義や捉え方の違いであり、一般の人々の認知が「誤っている」とは必ずしも結論づけられない。 [村上史朗]

参考文献

[1] P. Slovic, "Perception of risk", Science, 236, pp. 280-285, 1987

[2] 中谷内一也『環境リスク心理学』ナカニシヤ出版, 2003